モノと情報班

メコン川中流域における竹製筌類の考古学的民族誌と生態史への貢献

後藤 明（同志社女子大学現代社会学部）

キーワード：筌、漁撈技術、物質的サイクル、長期的適応、竹の利用

An archaeological ethnography of basketry fish traps in the Middle Mekong River and its contribution to the ecological history.

Akira GOTO (Contemporary Social Studies, Woshisha Women’s College)

Kew Words: basketry fish trap, fishing technology, material cycle, long-term adaptation, use of bamboo.

1. はじめに

昨年のレポートでは [後藤 2004a]、アメリカの人類学者 C. オスグッドの民族学的な物質文化記述 [1940] の特長について論じた。従来の物質文化記述は、特定範疇の物質文化（例　エビ筌）について、調査者がいわば恣意的に典型的（typical）とする資料の記述で終わっていると考える。それに対しオスグッドの優れている点は、特定形式とされる物質文化範疇内の形態、材料、構造の変異のみならず製作者や製作時期、製作能力などに関する変異、さらに使用においてはその設置場所や使用法、耐久性・ライフサイクルなども含めて記述しようとすることである。

おそらくオスグッドはアメリカ総合人類学の伝統的教育を受ける中で、考古学の業績を併せ持つことが背景にあるだろう。すなわち考古学者はいわば資料の中の無限の変異の中から文化的に意味のある属性を抽出し、型式を設定してゆくという手続きをとる。また考古学的資料はいわば最終的に廃棄された資料であるゆえ、考古学者は道具のライフサイクルと廃棄にまで気を配るからである。

人類学者あるいは歴史科学における考古学の貢献の常識的理解は、文献が存在しない先史時代の生活や歴史を物的証拠から明らかにすると言うことである。あるいはアナール学派歴史学の影響をうけ、他の社会科学が扱えない長期的な過程を扱うことができるのが考古学であるという理解も存在する。しかし本稿で主張したい考古学的視点の特長はそのようなものではない。考古学にもっとも近いのは民族学的物質文化研究と従来考えられてきたが、両者は根本的に違った発想から出発しており、似て非なるものである。

考古学者による民族学的調査も含め、狭義のエスノアーケオロジー（ethnoarchaeology）が民族事例の考古学への適応を主眼とする [David and Cramer 2001]。本稿で言う考古学的民族誌（archaeological ethnography）とは、考古学の特性を活かした民族誌記述を主眼とする。さらに考古学特有のモノの見方が、考古学以外の分野からは見えない人間行動のどのような側面を明らかにするのかという根本問題に立脚している [後藤　印刷中]。

2004 年度は 8 月に行ったメコン川流域における竹製筌資料の記述を、上記のような従来にない視点から行うことで、モノから得られる情報という問題に新たな光を当てたい。さらに考古民族誌的視点が生態史に対してもつ意味についても考察する。

2. 調査概要

本年度の調査は 2004 年 8 月 10 日から 24 日までの日程で行った。とくにルアンプラバンから川船をチャーターしメコン川を遡上、パクウからウー川に入ってムンゴイまでの地域で使用されている竹製筌を中心とした観察を行った（地図）。観察の視点は前稿 [後藤 2005a] に沿って、筌の製作、機能、設置状況などに関するもので、同じ形式の筌でもできる限り複数を観察し、行動の変異を捉える努力をした。

観察された筌の種類は約１５種類である。この分類は先にラオスの全域的に行われた報告に基づいている

地図（主な調査地）

[Claridge at el. 1997]。本調査はこの報告に記されている筌の種類の確認をしながらその分布上の特徴、あるいは同一形式と思われる資料の中の変異について実地の観察することが目的であった。

主な型式は、魚が入ると罠のように扉が降りてくる落とし筌 sai ran（drop-door traps）（cf. jun; Claridge 1997: 41）、かぶせ筌 soum（plunge basket）、トゲ筌 sai naam（barbed tattan cone）、水流にしかけるドウ soung（filter wedge trap）、竪筌 toun（uppright basket trap）、および円筒型で口にカエリをつけた種々の筌である lop や sae（cylindrical basketry trap）である。

竪筌には形態によって変異が見られた。また円筒形筌も機能、構造（例　口やカエリが単数、複数などの差）や全形によって細分が見られる。たとえば円錐形でカエリ（nga）を持つ sae nga、口が開いた円筒形の胴体の中にゴミをつめてそれに隠れた魚を捕らえる sae doung（doung ＝ゴミ）、エビ網 sae kung（kung ＝エビ、）などの名称の区別がある。

3. 物質文化とその変異

3.1. 技術的知

本調査で追究したのはハウツー的な、明示化される知識（connaissances）ではなく、身体化され、暗黙に伝達される技術的知（savoir-faire）である（Pelgrin 1991）。インフォーマントが、自分たちが製作・使用している人工物の変異の重要性に気づいているわけではないし、それを常に文字や言語で明示化しているわけではない。製作に関する知識は体に染みついた身振りも含め、一種の暗黙知であり、人工物製作の研究は職人と研究者との間の相互作業によって言語化あるいは明示化されることが多い [Keller 2001: 43]。

写真 1

たとえば今回の調査でルアンプラバンの対岸に位置する Bang Sian Man の村で竪筌 toum を観察したときである（写真１）。この種の筌は田など浅い静水的な状況の中に立てに設置し、下に空いた口から川魚が入るのを捉える漁具である。この地域では広く使用される筌であるが、村内でこれを作ることができる人物が限られていた。それは外形の籠部を作るのが難しいのではなく、むしろ口部のカエリを作るのに技術が要るためである。この部分は爪楊枝大に薄く削った竹の串を絹糸で結ん

で作る。そのさい口で糸をくわえながら結んでいく（写真２）。このように人工物製作の観察では身体も製作用具の一部として記述する必要がある
そしてそれを本体に装着するとき、糸の占め具合は、弱い水流に沿って自然に口が開くように調整することが肝要である。締め具合が弱いと口が開きっぱなしで魚に逃げられる。強いと口が開かず魚が入ってこない。人々はこの筌の口を水流の強さや水深によって（従って季節にも依っても）水流に対して逆向き、あるいは水流に横になるように設置するが、そのたびにこの口の調整が必要である。このようなコツは村人が皆明示的に理解しているわけではない。筆者のような研究者が質問することで製作者や同席する村人がはじめて明示的に言語表現することは少なくない。

また下記 3.3. で述べる技術制度論に関わるが、聞き取りした老人はこの種の筌造りの名人で他の人のためにもこの筌を作って村内で売るという。その際、筌全体を売る場合と、口の部分だけを売る場合の両方がある。

写真２

このようにオスグッドが言うように、ある型式の筌資料ひとつとってもそのサイズ、編み方に製作者内、製作者間に変異が見られる。同一製作者がほぼ同時に製作する作品にも変異が見られるし、また個人のライフサイクルにおいても熟練や技能の衰退などによって変異が見られる。

3.2. 形態・構造上の変異

人工物は多くの属性を持つ。そして各属性が変異し、それが組み合わさっていわば無限の変異を生み出す。しかしその変異はランダムではない。すなわち各属性にはモードないしピークが存在し、また複数の属性には特徴的な偏りが見いだされる [Clarke 1968: Fig. 36]。考古学者が発掘された資料から帰納的に型式を導き出すのはこのような手がかりによってである。

一方、通常民族学者は「何々型筌」のような範疇をあらかじめもってフィールドに赴き、その「代表的」あるいは「典型的」資料を少数だけ実見し、計測・撮影あるいは採集する。その範疇は各のもっている常識、過去の文献に見られる範疇、あるいはインフォーマントからの情報である。
前項でも述べたが、同じ人が同時に同じ型式の人工物を製作するときでも、まったく同じものが作られるわけではない。観察しているとむしろ絶えず生み出される幅のある結果をある一定の限度の中に軌道修正しながら、最終的には規格内の製品を作り上げていくのである。たとえば円筒形の筌の場合、縦籤に横籤を通すことで外形を作る。横籤を通すとき縦籤１本あるいは２本ずつ通してゆく。ところが縦籤の本数が偶数本の場合、同じ通し方をすると常に同じ縦籤が横籤の上ないし下に位置してしまい構造を弱める。そのさい一回りした段階で一度規則を破りパタンを崩す（１本ずつ通すなら２本、２本ずつなら１ないし３本通す）ことによって一本の縦籤が横籤の上下に（交互に）一回ずつくるようになる。最初から縦籤の本数を計画していないのは、横籤を一周させたとき、製作者が若干手を止めて具合を見て判断することからわかるのである。製作者はそこで臨機応変に規則を破りつつ、全体の規則（規格）を保っているのである。

たとえば今回ムンゴイで観察した円錐形の筌 sai nga である（写真３）。この型式の筌は口が開いており、このまま田んぼの水路などに、口を上流に向けておいて魚が入り込んで出られなくなったのを捕らえるのである。この型式は竹の片方の節を残して、もう一方を裂いていくことで縦籤を作る。結果としては円錐系の筌ができあがる。この場合縦籤と横籤は一本ずつ通す形式をとる。しかし竹を縦にさくとき、個々の籤をさらに表裏にさいて根本で裏返して、それを一本一本縦籤にするという工夫がなされる。したがって最初に裂く数が奇数であっても偶数であってもそれを２倍するのであるからかならず偶数となる。そこで奇数となるように表裏を裂いていない籤が１本していた。このことにより横籤を一本ごとに上下に通していっても同じ籤がか

写真３

ならず次のサイクルでは上下が逆になり、構造を弱めない。このように製作の戦略は、目的とする筌の構造、作業の迅速さ、などさまざまな要因の総合的な判断あるいは「妥協」の上に決定されると思われる。

同じ工夫はウー川流域でもっとも広範囲に用いられ、一部商業的にも用いられる川エビ用の筌 sai kung でも観察された（写真４）。この筌も竹　　の節を残して縦に裂いて縦籤を作る。この縦籤はさらに表裏に裂いてそのペアが隣通しで縦籤に使われる。当然縦籤総数は偶数になる。横籤は根元では１（横）対１（縦）、中頃からは１対２で交差しているが、いずれにせよ縦籤が偶数では同じ縦籤が常に横籤の上ないし下になってしまう。それで観察すると、すべての縦籤は表裏ペアに裂かれるのだが、そのうち一本だけは根本に折り返して依られ、最初の横籤として使用されている。この横籤がなくなると別の竹籤を横ヒゴとして足して作業が続けられる。いずれにせよここでも縦籤を奇数にする工夫がなされている。

写真４

3.3. 製作ないし使用される脈絡の変異

さらに筌が製作される種々の脈絡においても変異が見られる。たとえば個人が自分用に作る場合と、世帯工房などである程度販売を目的として作る場合、全く同じ型式の人工物をつくるのでも工程に差が見られる 。

さらに製作する人の性別、年齢、民族性などにも変異が存在し、それが人工物分布の異なった多元的な社会的領域（social sphere）を形成する（Welsh and Terrel 1998）。これは単に効率上行われる分業や協業のパタンだけを意味するのではなく、誰がどの作業をやるべきか、やらざるべきかというジェンダーあるいは社会階層論的なイデオロギーの関与を意味するのである。また世帯であれ工房であれ、同じ人工物が製作されるためには材料の仕入れから労働計画を含め一種の「民俗経営学」的な考察が必要である [後藤 2001, 2002a, 2002b]。

このように製作技術は確固としたシステムというより、ある幅における軌道修正、規則に沿った即興と言った方が正しい [後藤 1997、2002a]。また製作を可能にする種々の社会的ネットワークを含めて考えるに、むしろ制度的な様相を呈すると考える。一部のフランス研究者はまさに M. モースのいう技術は全体的社会事実（total social fact）であるという。また製作技術はハビトゥス的である [Dietler, Michael and Ingrid Herbich 1988]。

本稿では便宜的に形態・構造上の変異と区分したが、本来は統一的に理解されるべきである。すなわち、このような差異は製作工程における選択、操作連鎖論的に理解できる。

3.4. 変異の生態史的な意味

変異の生態学的な意味。同一型式の人工物に変異が見られる場合、生態学的な意味を認められる場合がある。すなわちそれは動物学的には行動の幅、あるいは遺伝学的には遺伝子プールの多様性に相当する。そして環境条件が変化した場合、あるいは異なった環境を移住した場合、その変異の中から新しい条件に適した属性が淘汰されると考えられる。東部ポリネシアの最初の人類移住のさい、初期釣針組成に大きな変異が見られ、やがてそれが規格的な釣針組成へと変化するのは、新しい環境での行動的な実験の結果であるという考察もなされている [Kirch 1980]。

今回の調査で全体像を押さえるには至らなかったが、村落毎に使用されている筌の悉皆調査をすることで、筌を考古学的な概念である組成（assemblage）として捉え、その村落が置かれている生態学的な状況あるいは社会環境の状況によって、筌の種類の数、すなわち変異幅を捉えることができよう。前者の生態学的な状況とは資源の多様性に対応するし、後

写真５

者はたとえば自給自足的な生計的漁撈と商業用の漁撈といった異なった社会的需要があるか否かなどを指すであろう。

また同一筌形式の使用される環境条件によってサイズや構造などに変異が生まれる。たとえばルアンプラパンからウー川に見られた口蓋が落ちる形式の罠筌 sai ran にはサイズに差が見られた（写真５）。また文献と比較すると [Claridge 1997: 41-44]、口蓋を落とす仕掛けは同じように石の重しが用いられるものの、筆者が観察したものとはその仕掛けが微妙に異なるのである。これはいわゆるスタイル的なものか、機能的な必然性があるのか、今後の調査の課題である。

4. 人工物のライフサイクル

4.1. ライフサイクルと物質サイクル

人工物のライフサイクル論の原点的発想は考古学者シファーによる行動考古学、C- 変換と N- 変換などの概念と、社会人類者アパデュライの人工物の social life の概念であろう [Schiffer 1976; Appadurai 1986]。

写真６

さらに人工物は製作と使用そして廃棄というライフサイクルがあるものの、その段階移行は一線的ではなく、多様な「フィードバック」的なサイクルが存在する。つまり修理、調整、転用などである。かつまたものは作りつつ使用するもの、製作と使用は同時進行するものである。製作者と使用者が別のことは珍しくないが、修理や調整は誰がやるのかが問題となる 。オスグッドが製作の時に生ずる音や臭いだけでなく、いわゆる製作に伴うゴミなども民族誌記述が着目すべしと言ったのはやはり卓見である。

さて今回の調査では再利用的な筌を観察した。それは土器作りで有名な Ban Chan 村の事例である。soung tong pam と呼ばれる太い竹を縦に裂いただけの筌である（写真６）。それは水流のある場所に口を少し上にしておき、自然に流れに沿って魚を落とし込む筌（filter wedged trap）であるが、その口に土管を使用している。聞き取りによるとこの種の筌には必ず土管が使われるわけではなく、破損した土管が口にちょうどいいので転用したということであった。以下の 5. でもふれるが、文化変容により従来存在しなかったさまざまな素材を転用するという状況は、ひとつの適応行動であるので注目したい。あるいは陶器製品が豊富に廃棄されるこの村独特の現象なのかもしれない。

廃棄に注目するのは生態史の大きな課題である。最近大きな問題となったのは廃棄物による環境汚染である。今までは自然の中で腐敗して問題なかった物的サイクルに外部から異なった素材が入ってくる。しかし人工物のライフサイクルは不変であると、そのような外的素材が環境に廃棄されることになる。たとえばナイロン製漁網の放置である。

4.2. 採集場所――ひとつのライフサイクルの記述

研究者が筌などの資料を採集してくるのは、多かれ少なかれその社会文化的脈絡から切り離して来るわけである。資料は現に使用中だったり、次の季節の使用のために家の軒下に保存してあったり、あるいは十年も使わないが祖父の思い出のために納屋にとってあったりしたものをそのような脈絡から切り離して採集してくる。

写真７

筌のような設置型の漁具の場合、どこに、いつ、どの程度の期間設置されるのか。使用しない季節にはどうするのか。また最終的にどのように廃棄されるのかというライフサイクル的な視点で

記述することが重要であろう。

ところで筌の採集場所であるが、ラオスでは商店やレストランにしばしば筌が飾ってあり、釣り銭入れなどとして使用されている（写真７）。これも筌の一つの使用法である。筌を意味するラオス語が勝利を意味する単語の音に近いので縁起が良いと聞いた。

さて 70 年代の渡辺仁調査隊で採集された筌が東京大学の総合博物館に収蔵されている（写真８）。渡辺隊が採集した件の筌資料であるが、表面に油ないし煤が付着して、光沢があった。そのため素材の荒廃が少ないのだが、水の中で漁撈活動に使用したものとは思えなかった。むしろレストランや厨房に飾ってあったものではないかと推測される。このように採集したときの脈絡にライフサイクル的な情報も必要であろう。

その資料と類似の筌を今回パクウ村で見た（写真９）。それは川を見下ろすレストランにおいてである。この筌は sae morng と呼ばれる。全体の形態は砲弾のような形をしており若干異なるが、魚のはいる口が端ではなく途中に斜め上に空いていている点が渡辺資料の構造と同じである。両者のフォルムには差が見られこれがスタイル差なのか、それとも機能差なのかは検討を要するが、この二つの資料がおそらく両方装飾用であったという点は何を意味するのか、偶然かそれとも理由があるのか、今後明らかにしたい。

写真８

写真９

5. 技術的借用の生態学的意味

文化生態学および新進化論の祖の一人、J. スチュワードによると「文化生態学は一社会が環境に適応（adaptation）する過程について研究する学問であり、その課題は、文化的適応が進化的な社会的変形（social transformations）を促すかいなかを見定めることである。しかし文化生態学はこれらの変化を環境との関係だけではなくその他の関係、すなわち、社会間および社会的制度間の相互関係から理解することを必要とする」[Steward 1977: 43]。そして一般的な理解とは異なり、スチュワードは異文化接触による文化変容、そして接触による技術的借用の重要性を考えていた [Steward 1977: 314-315; Cf. 後藤 2005]。

本論で扱った竹製筌は比較的保守的な道具である。しかし今後外国の文化との接触でどのような変化が生まれるか。たとえば筌の携帯や構造は保ちつつ、素材が金網などの金属に変化していくことは東南アジアの海岸部でよく起こる現象である。そして筌のような生産性の低い漁具は放棄される傾向がある一方、逆に「活魚」のような特殊な用途の場合、魚を生け捕りできる筌が再認識される、またベトナムの調査で観察したように、ドイモイ政策以降、合作社ベースの大規模な漁業がドイモイ政策以降、個人ベースの小規模な漁撈活動に戻ると同時に、筌のような低資本の漁具の重要性が復活するような現象も見られる。すなわち社会経済的な脈絡の変化によって技術要素の選択が影響を受けるのである。

今回観察した筌はほとんどが竹製であった。しかしパクウ村では一点だけ、金属製の筌を見た。これは金網で作った箱形の筌 tum kang pa であるが、市場で売るための魚を捕らえるということである（写真１０）。パクウは仏像の安置された洞窟観光の拠点であり観光客が

写真１０

この地域ではもっとも多い村である。そのような社会経済的な状況が筌組成にどのような影響を与えているか見極めるのも今後の問題である。技術を制度ないし全体的社会的事実と捉える必要性がここでも示されている[Hoffman and Dobres 1999]。

引用文献

Appadurai, Arjun
1986 Introduction: commodities and the politics of value. In: A. Appadurai (ed.). The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective, p.3-63. Cambridge University Press, Cambridge.

Clarke, David L.
1968 Analytical Archaeology. 2nd ed. Methuen, London.

Claridge, Gordon, T. Sorangkhoun and Ian Baird.
1997 Community Fishefies in Lao PDR: a Survy of Techniques and Issues. IUCN Lao PDR, Technical Report 1.

David, Nicholas and Carol Kramer
2001 Ethnoarchaeology in Action. Cambridge University Press, Cambridge.

Dietler, Michael and Ingrid Herbich
1998 Habitus, techniques, style: An integrated approach to the social understanding of material culture and boundaries. In: The Archaeology of Social Boundaries, ed. by M.T. Stark, pp. 232-263.. Smithsonian Institution, Washington D.C.

後藤 明
1997「実践的問題解決過程としての技術――東部インドネシア・ティドレ地方の土器製作」『国立民族学博物館　研究報告』22(1): 125-187.
2001 「フィリピン・ビサヤ地方における手工芸生産――小規模経営組織に関する予備報告」『宮城学院女子大学・人文社会科学研究所論叢』10: 29-54.
2002a「技術における選択と意志決定――ソロモン諸島における貝ビーズ工芸の事例から」『国立民族学博物館研究報告』27(2): 513-359.
200bc「東南アジアにおける鍛冶の生産組織――東部インドネシア・北マルクおよびトラジャの鍛冶業を中心に」『同志社女子大学・学術研究年報』53(2):1-20.
2004a 「物質文化情報化のための方法論再考」『メコンプロジェクト　2003 年度報告書』
2004b「考古学的なモノの見方」『考古学ジャーナル』513: 1.
2004c 「「叩き」の意味――フィリピン・インドネシアにおける調査ノート」新潟県立博物館編『火炎土器の研究』、pp.243 － 247、同成社。
2005 「J. スチュワードの文化生態学再考」『現代社会フォーラム』 1:12-20。

印刷中 「交易者の考古学的民族誌」『考古学ジャーナル』

Hoffman, C. R. and M. Dobres
1999 Conclusion: making material culture, making cultural material. In: M. Dobres and C.R. Hoffman (eds.), The Social dynamics of Technology, pp209-222 Smithsonian Institution Press, Washington D.C.

Keller, C.M.
2001 Thought and production: insights of the practitioner. In: M.B. Schiffer (ed.), Perspectives on Technology, pp. 33-45. University of New Mexico Press, Albuquerque.

Kirch, Patick V.
1980 Polynesian prehistory: cultural adaptation in island ecosystems. American Scientist 68: 39-48.

Lemonnier, Pierre
1992 Elements for an Anthropology of Technology. Anthrpological Papers Museum of Anthropology, University of Michigan, No. 88.

Osgood, Cornelius
1940 Ingalik Material Culture. Yale University Publications in Anthropology 22.

Pelgrin, Jacques
1991 Les savoir-faire: une trés longue histoire. Terrain 16: 106-113.

Schiffer, Michael.B.
1976 Behavioral Archaeology. Academic Press, New York.

Steward, J.H.
1955 Theory of Culture Change: the Methodology of Multilinear Evolution. University of Illinois Press: Urbana.
1967 Modernization in traditional Societies. (Originally written as an introduction to J. H. Steward ed. Contemporary Change in Traditional Societies. Revised and included in J.H. Steward 1977, pp. 297-33.)
1977 Evolution and Ecology: Essays on Social Transformation by Julian H. Steward. Edited by J.C. Steward and R.F. Murphy. University of Illinois Press: Urbana.

Steward, J.H. (ed.)
1956 The People of Puerto Rico: Study in Social Anthropology. University of Illinois Press: Urbana.
1967 Contemporary Change in Traditional Societies. 3 vols. University of Illinois Press: Urbana.

Welsch, Robert L. and John E. Terrel
1998 Material culture, social fields, and social boundaries on the Sepik Coast of New Guinea.

In: M.T. Stark（ed)、The Archaeology of Social Boundaries, pp. 50-77. Smithsonian Institution, Washington D.C.